説教要旨『何を見に行ったのか』

マタイによる福音書　１１章２～１１節

渡辺和子さんは、「（批判することは）、相手にとってはある意味『裁かれる』ことであり、往々にしてその人の存在が否定される可能性さえ持っている」とした上で、批判する側のポイントの置き方が大切だとしています。例えば、「あの人は、正直者だけれども仕事が遅い」というのと「あの人は、仕事は遅いけれども正直者だ」というのとでは、同じ人物への批評でも、どこか違うという訳です。それは、相手の悪いところ、良いところのどちらを強調しようとしているのか、出来得る限り相手を愛したいと強く願っているのか、その意識の違いから生まれてくるものであると言えるでしょう。

洗礼者ヨハネは、イエスが「ヨハネより偉大な者は現れなかった」（11 節）と認めるほどに、清廉潔白な人物であったと言えます。そんなヨハネが、イエスに期待したのは、自分を不当に牢に閉じ込めているヘロデ王（14 章）のような悪を裁き、滅ぼす救い主の姿でした（3:12）。ところがイエスは、罪人を招いたり、敵を赦せと教え回っています。ヨハネは「来るべき方は、あなたでしょうか」（3 節）と問わざるを得ませんでした。それに対してイエスが示したことは、人の命の「回復」です（5 節）。イエスは、ヘロデの滅びではなく、ヘロデの命の「回復」を望んでいたのではないでしょうか。

しばしば、イエスはなぜこんな時に「人を裁くな、汝の敵を愛せ」などと余計なことをおっしゃるのか…なぜ「お前の思う通りに生きてごらん」と一言おっしゃってくださらないのか…と、つまずく時があります。しかし、誰よりもイエスご自身が、自分を迫害する者達につまずくことなく、「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ 23:34）と祈り、命の回復を願い続けておられたことを忘れてはなりません。イエスは、生き得る限り、人を裁き滅ぼそうとする方ではなく、人を愛そうとする方へと歩まれました。もちろん、愛したくても愛せない私達の姿があります。ですが、神と人を愛するという律法を守れない「天の国で最も小さな者」（5:19）でも、あの「ヨハネよりは偉大である」（11 節）とイエスは言われます。なぜなら「愛せない」という深い嘆きは、真剣に相手を「愛そう」とした証であり、イエスの愛と赦しがどれほど大きなものであるのかを味わい知っている証でもあるからです。そのみ言葉に励まされながら、相手を愛したいというイエスの思いに出来得る限り私達の思いを合わせられるよう、祈り求め続けたいと願います。その先に、主イエスがこの地上で見ておられた天の国を私達も見るのです。

（文責：望月達朗牧師）